

ベトナムの企業で働く元交換留学生の留学評価

八若 壽美子*

(2021年11月8日受理)

Evaluation of Study Abroad by Former Exchange Students Working at Vietnamese Companies

Sumiko HACHIWAKA*

(Received November 8, 2021)

要旨

本研究では、ベトナムの日本関連企業で主として通訳・翻訳業務に携わる元交換留学生2名のライフストーリーを分析し、留学経験がどのような意味を持ち、人生にどのような影響を与えているかを検証するとともに、留学評価が日本語習得にどのように関わっているかを探った。

奨学金やアルバイト経験の有無、受入態勢などの違いなどによる個別的な経験が語られたが、2名ともに留学評価は肯定的であった。2名は留学当初は友人作りに苦労したが、その後サークル活動などを通じて日本人、留学生とも良好な関係を築き、留学終了後も維持していた。留学中直面する困難を自力または周囲のサポートを得て克服することによって自信を得ていた。ベトナムでは日本に留学したこと自体が評価され、留学を通して得た高い日本語能力や日本で生活しなければわかりにくい社会規範や日本人の考え方などへの理解が、日本人を顧客とする業務の遂行に大きく寄与していた。以上のように、日本で生活したからこそ得られた人的ネットワークや体験、日本社会や文化への理解が肯定的に評価されていることが確認された。

【キーワード】 ベトナム、企業、元交換留学生、留学評価、ライフストーリー

1. はじめに

近年、留学成果の評価には社会人となった元留学生の視点からの検証が必要であるという観点から、単位取得を目的とした1年未満の交換留学においても、実施機関のプログラム検証として元交換留学生を対象としたフォローアップ調査が行われている(大河原2008, 小山2016, 吉野2017)。これらの調査では、交換留学が日本語能力向上や日本についての文化的知識獲得、自己成長の場として肯定的に捉えられていることとともに、留学評価が社会人としての経験を経て再評価されてい

*茨城大学全学教育機構

ることが報告され、留学中や留学直後だけでなく長期的視野での実態把握を積み上げていくことの重要性が指摘されている。

筆者は、ライフストーリー研究¹⁾の手法を用い個々の元留学生の留学評価と日本語習得との関連を解明しようとする一連の研究の中で、元交換留学生の留学評価についても取り上げてきた(八若 2018, 2019, 2020, 八若・小林 2021)。

母国で働く元交換留学生の留学評価の研究では、日本語専攻のインドネシア人元交換留学生3名のライフストーリーを分析した(八若 2018)。その結果、日本語専攻で日系企業などで主として通訳・翻訳業務に携わる3名にとって、留学は日本語の上達はもとより、自信を得、視野を広げ、現在の仕事にも繋がる経験として高く評価され、約1年間という期間であっても留学が人生に強いインパクトを与える意義深い経験であることが報告されている。また、交換留学が大学院留学という次のステップへの動機を提供する場にもなっていることも指摘されている。

八若・小林(2021)では、タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価についてライフストーリー・インタビューを行い、留学の成果として日本語の上達の実感、日本の暗黙の社会規範の受容、自信の獲得、日本への持続的な関心と愛着などが認められたことを報告している。特に、アルバイト経験を通して学んだ日本人の就業態度や慣習への理解が現在の業務遂行に寄与していた。

本研究では、これらの研究を踏まえ、日本語専攻で日本関連企業で主として通訳・翻訳業務に携わるベトナムの元交換留学生2名のライフストーリーを取り上げる。国際交流基金(2020)によれば、ベトナムでは、ベトナム人の雇用に積極的な日本企業が増えており、現地の日系企業への就職機会が急増しているという。また、ベトナム国内の日本語教育機関数・学習者数ともに大幅に増えており、顕著な日本語学習熱の高まりがみられるという。

本研究では、ベトナム人元交換留学生2名を対象に、八若(2018)、八若・小林(2021)と同様の手法で、専攻と卒業後携わる業務が密接に関わる場合、留学経験がどのような意味を持ち、その後の人生にどのような影響を与えているかを検証する。さらに、2名の留学評価が日本語習得とどのように関わっているのかを探る。

2. 研究方法

2019年12月に、ベトナムの日本関連企業で働く元交換留学生2名にライフストーリー・インタビューを行った。使用言語は日本語であった。

インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示と大まかなインタビュー項目²⁾を伝え、インタビューでは調査者が必要に応じて質問を加えながら自由に話してもらった。インタビューは協力者の了解を得て、録音し、文字化した。インタビューの内容の中から、日本語習得、人的交流に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。紙幅の関係で、協力者の言葉をそのまま掲載する会話形式と引用を交えた要約の形式³⁾とを併用した。また、フィラーや言い間違いは省略し、最小限ではあるが理解に支障があると思われる間違いは修正した。個人や場所が特定される固有名詞は一般名詞や記号にした。

表1 インタビュー協力者の略歴

	Aさん	Bさん
日本語学習歴	大学（日本語専攻）	中学・高校（選択科目）、大学（日本語専攻）
留学した学年	3年次終了後	3年次終了後
卒業後の進路	大学で日本語教師（3年半）、大学院でも学ぶ	留学・技能実習生送出関連企業（～現在）
転職・その他	日本の独立行政法人契約社員（2年半） IT企業社員（マーケティング日本担当～現在）	なし

3. インタビュー協力者の語り

本章では、各インタビュー協力者の語りを「日本語学習及び留学のきっかけ」「留学中の生活」「人間関係」「留学生としての学修」「留学後」「留学を振り返って」の項目について具体的なエピソードを交えて提示した。

3.1.1. Aさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

子供の頃から日本の漫画が大好きで、大学で日本語を勉強し始めた。勉強し始めて1年間ぐらいはとても難しいと感じた。それまで勉強した英語とは日本語は全く違うと感じた。文字も違うし、語順も逆なのでいつも考えてから言う感じだった。場面が違うと言い方が違うし、曖昧で「行間を読む」ことも求められる。しかし、「日本の社会、自分の目で見たい」、「映画と、マンガ、似てるかどうか」と思い、どうしても留学したいと思うようになった。当時交流のあったX大学には奨学金を得て先輩が行っていたので、可能性が高いと考えた。奨学金の選抜試験は大学のトップ10名が受験できるという難関であったが、それを突破して3年次終了後留学した。

日本語能力試験2級（現N2）を取得してからの留学だったが、それまで日本人との接触は日本語の先生2名だけだったので、日本で自分の日本語が通じるかどうか不安だった。

通訳になりたいという希望があり、「1年日本に住んで、帰ったら何でもわかる」ようになると期待していた。

《留学中の生活》

空港までベトナムの大学と交流のあるX大学教員が迎えに来てくれたり、指導教員が生活用品を準備してくれたりして、順調に留学生活が始まった。慣れない寒さは大変だったが、生活面では、日本はたいていのものに説明書などがあるなど便利なので、困ったことはそれほどなかった。

初めての一人暮らしで最初少しホームシックになったが、同じ大学から一緒に留学した友人がいたことや、Skypeを使って画像を見ながら家族と話せたことで、乗り越えられた。

X大学のある町は漫画でみていた日本とは違っていたことにまずびっくりした。

A: 最初、びっくりしましたよ。

*:⁴⁾ マンガと違うって思って。

A: そうですね。日本は発展国なので、どこでも高いビルがあると想像しています。そして、ハノイでも、結構その時は発展してきたので、高いビルもたくさんあるし、結構にぎやかでした。

X大学のある町は、静かでした。

また、日本は「世界で一番安全な国」だと聞いていたのに「痴漢注意」という看板が多いのにも

驚いた。痴漢については他の人からも聞いており、7時半までに留学生寮に帰るようにしていたので、幸いなことに自身が痴漢に遭うことはなかった。

しかし、留学当初に期待と違ふと最も感じたのは、日本人の対人行動の「冷たさ」だった。

A: マンガでは、親切な人ばかりだと書いていますので、実際、周りの人は忙しくて、ちょっと冷たい感じが。

*: やっぱりそうなんですか。冷たい感じが。

A: でも、X大学の授業で、実はその人が冷たいわけではなくて、ただ恥ずかしいとか、他の人がそうだと自分もそうしなければならないという人が結構いますので。だんだん冷たさが減りました。でも、最初は本当に冷たかった。

さらに、自分自身の日本語の不十分さも感じた。

A: 最初は伝えたいことは全部、伝えきれないような気がします。なぜかというと、生の日本語は違っているようです。

それまでの日本語の勉強では、ベトナム語から日本語に訳していたので、どうしてもベトナム語の影響があると感じていた。

最初戸惑ったこととして印象に残っていることの1つに「自己紹介」がある。

A: 日本へ行く前には、自己紹介は、ベトナムではあまりしなかったんです。でも、日本へ行って、どこでも自己紹介。1日には、3回ぐらい自己紹介とかしてたので、結構、慣れてきました。ですので、今、仕事で誰かに会うときも、自然に自分のことを、先に自己紹介を行いますので、日本が・・・。

*: 習慣になったんだ？

A: はい。そうですね。日本人だけではなくて、ベトナム人とか、他の、ヨーロッパから結構人を雇っても、これは、親切な挨拶として、みんな受け入れてもらったんです。

*: 自分が誰か、どういう人かっていうことを言うっていうのが、関係づくりにいいっていう感じですね。

最初は知っている人もいるのに、何回も言うのが恥ずかしかったが、今では慣れて全く違和感もなく、友達になりやすいと感じている。

《留学生としての学修》

指導教員のゼミ、日本語教育やメディア関係の科目など日本人向けの授業も数科目とった。授業で参考文献などで読んだことをもとに議論するのが大変だった。

A: 昔、長い文章は、試験、読むだけでしたので、長くても、3、4ページぐらいで終わりということですけど、日本、X大学で参加した授業の中では、いつも、その本を半分とか読んで、次の・・・。

*: 授業の準備をしないとイケないっていうこと。

A: そうですね。

レポートも大変だった。

*: レポートとかも大変でしたよね？ それこそ、これだけ授業、取ると。

A: はい。私のめちゃくちゃな日本語、多いんで、ちゃんと採点してくれて、本当にありがたかったです。

おそらく1年間だけの留学生ということで先生方もそれほど厳しくなかったのだと思う。大変だったが、単位もとれて何とかあった。今は「よかった」と思っている。

来日後3か月の頃 JLPT1 級（現 N1）に合格し、だんだん本も読めるようになったと感じた。

A: 今でも N1 を持っている人でも、本が読めない人が結構いますね。でも、私は経験のおかげで。

*: で、やっぱり、たくさん読んだおかげで。

A: はい。そうですね。文章の書き方も、結構うまくなりました。

今でも作文と読解は得意である。

1年間留学すれば何でもわかるようになるという期待に反して、「勉強はまだ足りないまま」帰国したと思っていたが、帰国後の授業では聴解や翻訳のスキルの上達を実感した。

A: ベトナムに戻って、1年、(大学で)勉強したじゃないですか。そこで、また、翻訳の授業があって、筆記試験は全然、私にとっては問題がありません。勉強しなくても、簡単に合格できるようになります。

《人間関係》

来日後1学期目は寒くてあまり外に出られず、チューターによく助けてもらった。2学期目、春になってからは赤十字サークルなどの交流活動に参加し、楽しかった。日本人だけでなく、韓国、中国、モンゴル出身の友人もできた。

2学期目の4月からはX大学の新生と一緒に授業や活動に参加した。みんな初めて会うので交流しやすいと感じた。「そこで、みんな一緒にグループでレポートを出しますので、結構、交流が多かった」と振り返っている。

指導教員との関係も良好だった。指導教員からは授業外でも日本の文化などについて多くのことを教えてもらった。授業に関連してお祭りや有名なお寺などに連れていってもらった。その中には他の留学生と話していて自分しか知らない知識もある。授業外でも有名な滝やリンゴ狩りにも一緒に行った。指導教員とゼミの留学生と一緒に花火大会に行ったのもよい思い出だ。キティやドラえもんなどの形など新しい発想のものがあつ、それまで見た花火の中で一番きれいだと思った。指導教員のおかげで、楽しい1年が過ごせたと思う。

数年前まではX大学の教員が交流プログラムでベトナムに学生を連れて来ていたので、交流活動に参加したりしていたが、最近はあまり連絡をとっていない。留学中親しくなった友人とはFacebookを使って帰国後も連絡を取り合っていた時期もあったが、Facebookをやめてからは連絡もなくなった。指導教員とも日本への出張の際などに連絡をとっているが、この数年は会っていない。

地域の人との交流は個人的には少なかったが、中学校や高校に行つて自国の文化を紹介する親善大使の活動に参加した。

《留学後》

留学終了後1年間出身大学で勉強し、卒業した。当時は日本語教師になりたいという気持ちが強く、いろいろ選択肢はあつたが、日本の独立行政法人によるプログラムがある理系大学に日本語教師として就職した。日本人スタッフと一緒に教えることができることや留学で経験した直接法で教

えることなどが魅力だった。自分が体験してよかったと思うことを学生にも体験してもらいたいと思ったからだ。

*: どうでしたか。日本語教師のお仕事は。

A: 楽しかったですけど、大変でした。ベトナムの、大学教師は結構、給料が安かったですので、大変です。

担当は基礎の日本語を教えることで、専門関連の日本語は日本人スタッフが教えた。学生は真面目でいい学生ばかりだった。大学卒業後日本で就職するというプログラムなので今はその多くの修了生が日本にいる。日本で経験を積んで、帰国後起業する者も多い。教え子が活躍しているのはうれしく思う。しかし、同プログラムが終了し、日本人スタッフが帰国して教育方針も変わったことから、3年半で大学を辞め、日本の独立行政法人に契約社員として就職した。

そこでは、「日本の地方の団体がベトナムの地方をサポートしたい」時の支援をするという草の根技術協力の仕事に携わった。制度としては正社員になることもできたが、情勢をみると可能性はあまりないと思った。ODAによる事業であるため、ODAが縮小されると自分の仕事がなくなると思い、2年半勤めて、29歳の時現在の会社に転職した。日本への出張が多く、日本語が活かせると思ったからだ。30歳になると就職しにくくなるという背景もあった。

*: これはどうやって探したんですか。

A: ただ、募集を見て応募しました。

*: そこを選んだ理由とか、そういうのは。まずは日本語？

A: 日本語。それから、今、ITは結構、はやっていたんです。大学で教えていたときにも、みんなは就職（活動）したら、すぐ内定もらえるぐらい、すごいはやっていたんですから、ITがいかんと思って、ITに就職して。そして、うちの近くに、近い所を探しました。

現在勤めている会社は社長が日本で9年働いた経験があり、顧客は日本人が多い。今は日越の翻訳をチェックする立場でもある。

*: 今の仕事はどうですか。

A: まあ、いい仕事ですので。はい。

*: 選んで良かったっていう感じですか。

A: そうですね。

*: その、翻訳のチェックをしたり・・・。

A: 実は、マーケティング担当ですので、あの、日本の展示会に出展したりとか、新聞広告を出したりします。

日本語学習は留学終了後も続けている。大学で教えるために大学院に進学する必要があったので、勤務先の大学院に進んで日本語の指示詞をテーマに研究した。前職ではビジネス日本語の重要性も感じて勉強した。

A: ビジネス日本語は、前の勤務先に入ってから、ビジネス日本語はすごい重要だと思っていたんです。そこは、例を読んでも全然、分からないくらい、敬語ばかりですし、言い回しも多いんです。

現職については、IT 専門用語など実際の案件を通じて勉強している。

《留学を振り返って》

日本に留学してよかったと思うことはいろいろある。

まず、就職に際しても留学したことが評価されたと思う。

A: まずは、面接の時でも、日本行ったこと、特に、日本へ留学したことがある人は優先されるような気がします。日本人のお客さまと仕事をしますので、やっぱり、日本の感覚がある人が優先されます。

*: そうなんだ。やっぱり、何となく雇う側も、留学したことがあるっていいと感じているということですかね。

A: 私が、職歴を見て、分かると思いますけど、マーケティングの経験とか知識は全然、持っていなかったんです。でも、日本語ができましたので。それからマーケティングの知識を勉強させてもらって、今は担当になります。

*: なるほどね。両方できたら素晴らしいね。マーケティングのほうも。

A: そして、将来にも役に立つと思います。お客さんと話すときは、どこで留学するか、やっぱり、話になりますね。

顧客との対応に際して、学習した言語が日本語でよかったと思うこともある。

A: 今までは、開発して、お金を払わない人、日本人のお客さんはいません。ヨーロッパとか、シンガポールにはそういうケースが出ました。でも、私は日本市場を担当しましたので、全然そういう悩みはありませんけど、他の人は。

*: そういうところは、割と信頼できるかもしれないですね。

A: そして、日本人は真面目ですので、こちらの、時々注意不足のところがありますけど、いつも・・・。

*: ああ、はい。細かいところに気が付いてくれるっていう。なるほど。そういうことはあるかしれないですね。じゃあ、日本担当でラッキーみたいな感じなんですね。

A: 日本語を選んで良かった。英語だったら、今、苦労しています。

現職では日本語からベトナム語に訳すことが多いが、「日本人の発言を聞いて、細かいことが分からない人は、ちゃんと分からない」、日本での生活体験があるからこそわかると感じることもある。

さらに、留学全体を振り返って、次のように評価した。

A: 人生が変わりました。視野が広がっているし、その、考えも全然、変わりました。

*: うん。ちょっと具体的に、視野が広がるっていうのは、どういうことですか。

A: 前、ベトナムでは、先生が教えたことばかりを・・・。

*: 真面目に。

A: とか、そのことだけを信じてたんですけど、日本は違う世界ですので、それは本当に絶対、正しいかどうかを・・・。

*: 疑ってみる。

A: はい。自分の考えを持っています。

留学終了後、次の年留学する後輩のために注意すべきことを書き出して残した。銀行口座の開設や大学の旅行への申込み方、ゼミや授業の情報、交流イベントやサークル活動などについての情報をまとめた。後輩たちにも日本留学を勧めたい。安全で、いろいろな形でサポートしてもらえたからだ。

A: 勧めます。本当に。私は、海外、初めて行くのは日本ですので、良かったです。ですので、初めての海外は。だから、日本へ行ってください。

留学についてやっておけばよかったと思うことは、交流活動への参加と帰国後の友人たちとの連絡だ。

A: もっと、交流活動とか、他の活動に参加したほうがいいなと思っています。そして、戻った後は、そのときはみんなと連絡しなかったんです。ちょっと忙しくてとか、恥ずかしいとか。全然いいこと、大したことがないので、連絡しなかったんですけど、結局、止めてしまって、残念だったなって。

3.1.2. Aさんの語りのまとめ

Aさんは、大学から日本語学習を始め、JLPT2級を取得し、3年次終了後に留学した。留学当初日常生活でのコミュニケーションには大きな問題はなかったが、自分の言いたいことを十分伝えきれていない、「生の日本語」とは違うというもどかしさも感じていた。日本語の授業の他に、指導教員のゼミ、日本語教育やメディア関係の科目など日本人向けの授業も履修した。日本人向けの授業は、文献を読んだうえで議論したり、レポートで評価されたり、国の授業では経験したことのない授業形態だった。多くの文献を読んだり、レポートを書いたりするのは大変だった。留学中にJLPT1級を取得したが、留学前の「何でもわかるようになる」という期待のレベルには達せず、まだ勉強が足りないと思っていた。しかし、帰国後聴解や翻訳の授業で、上達を実感した。特に、読むことや文章を書く力がついたと思う。

人間関係では、留学当初日本人の対人姿勢が冷たいと感じ、友人作りに苦労した。授業で「恥ずかしさ」など日本人の対人姿勢の背景を知り、次第に「冷たさ」は感じなくなった。2学期目からは国際交流関連のサークルの活動やイベントなどにも積極的に参加するようになり、留学生、日本人学生の友人もできた。既に友達関係ができた中に入る難しさがあった1学期目とちがいで、新入生とは交流しやすさを感じた。授業のグループ活動を通じて友人ができた。帰国当初は友人たちと連絡をとりあっていたが、特に報告することもないと思ってFacebookを辞めてから連絡を取る術を失ったことを今は残念に思っている。指導教員との関係も良好で、授業外でもお祭りやお寺などに連れて行ってもらうなどし、指導教員のおかげで楽しい1年が過ごせたと思う。地域住民との交流が少なかったのは心残りだ。

大学卒業後はなりたいと思っていた日本語教師となり、大学で教えながら大学院を修了した。日本語教師の仕事はやりがいがあったが、給料が少なく大変だった。日本の独立行政法人によるプログラムが終了して、日本人スタッフが帰国し教育方針が変わったことを機に大学を退職した。その後日本の独立行政法人の契約社員として2年半働き、現職のIT関連企業に就職した。日本の展示会への出展や新聞広告の掲載などマーケティングの仕事をしていて、顧客は日本人が多い。日越の翻訳をチェックする立場でもある。

Aさんにとって、日本留学は視野を広げ、「考え方」を変え、人生を変えるような体験だった。

自分自身の考えを持てるようになったと思う。留学してよかったと思うことは多くある。まず、就職に際して留学経験自体が評価されたと思う。実際マーケティングの知識も経験もなかったが、顧客が日本人なので、日本語ができ、日本人の感覚がわかることが評価されたと思う。翻訳する際も、細かい点が日本での生活体験があるからこそわかると思う。留学したことが顧客との会話の話題の1つになることもある。顧客としても真面目な日本人は他の担当国よりいいと思う。

前職で感じたのはビジネス日本語や敬語の必要性で、現在も勉強しつづけている。日本語教師から転職して給料が上がり、自由な時間ができた点がよかったと思い、満足している。また、勉強した言語が日本語だったのもよかったと思うし、留学先が安全で様々なサポートのある日本でよかったと思い、後輩たちにも勧めている。

3.2.1. Bさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Bさんが合格した中学では、必修の英語以外にフランス語か日本語を選択して勉強することになっていた。迷っていたら、父親がニュースなどを見て「これからは日本語に投資」と勝手に選んだのが日本語学習のきっかけだった。「最初は嫌だったんですけど。なんで、全然聞かずに、(父が)自分で決めるんだよ」と思ったが、日本語を勉強してみたら面白かった。中学を卒業したらやめるという選択もできたが、高校に入ってから勉強を続けた。中学では週3時間、4年間でN5程度、高校3年間でN4程度になったと思う。

高校の時の日本人の先生の授業が面白くて興味がわき、勉強を続けたいと思ったため、大学で本格的に日本語を勉強し始めた。大学ではまったく日本語学習の経験のない学生と一緒にゼロから学び直した。最初は全部知っていることでつまらなかった。

B: 既に勉強してる私たちがいて。やっぱりゼロの学生さん、他の学生さんもそれを見て、すごく努力したんですよ。やっぱりもともと勉強してるのに、負けないわけって感じで。

*: 負けるわけにはいかないね。

B: それで、やっぱり、つまんないはつまんないけど。やっぱり、100パーセント完璧に、テストをやって、もう全部、満点にするっていう。

*: 新たな目標ができたという・・・。

このような競争的な学習環境が面白かったのかもしれないと思う。

当時は交換留学先はX大学だけだったので、優秀でなければ行けなかった。実力を見せたいという「プライド」があった。また、「やっぱり日本語を勉強するのに、日本へ行けないなんてちょっと残念じゃない?」とも思っていた。加えて、高校時代に作文コンテストで優勝して2週間交換プログラムで日本に行った経験があり、また行きたいという気持ちもあった。選ばれて3年生終了時にX大学に留学することになった。

心構えもできていたので、留学前の不安はあまりなかった。

B: 高校のときの、一度は行ったし、そのときも、日本語能力もN2ぐらいだったんで、そんなに言語的な問題はなかったんですけど。不安とかは、別になかった。

留学前の期待は多くの友達を作ることだった。

《留学中の生活》

10月の来日だったので寒さには困ったが、ベトナムで日本文化についての授業も受けていたこともあって生活上の問題はあまりなかった。ベトナムから持ってきた調味料などを使って自炊もできた。

しかし、留学前の期待に反して友達づくりは難しかった。

B: やっぱ、勉強したら、クラスの形で、日本人のみんなと一緒にいる気持ちだったんですけど、やっぱ、単位制度だったので、もう学生さんはバラバラなんで。クラスメートの感じは全然なかったんですね。他の外国人の留学生とかは、(日本語の) クラスになってるんですけど、それ、ちょっとクラスメートって感じだったんですけど。

指導教員のゼミにも参加したが、週1回だけだったのでクラスメートという感じにはなれなかった。さらに、留学生寮でも前の学期から住んでいる留学生の輪に入っていくことが難しいと感じた。

B: 寮に住んでたんですね。寮のみんなとは、チューターとかはいたんですけど。やっぱり、前期と後期があるんじゃないですか。で、前期から入っちゃった子が。私は後期からじゃないんですか。それで、もう、みんなはもう仲良しで。

*: ああ、なるほど。

B: お互いも知ってたし。新しいメンバー、私のような新しいメンバーだと、まだ不慣れないことが。それがあって。なんか、え？新しい関係をすぐに入れない。ラウンジに入っても、みんながこう見て。見られる感じだって感じで。

韓国人留学生はみんなに人気があったし、中国人は中国人で固まっている感じがして、既にグループができているように思えた。

コンビニとラーメン屋でアルバイトをした。ラーメン屋は先輩からの紹介だった。店長は「怖い」と言われていたが、冗談をよくいう面白い人で大変お世話になった。店長からは仕事に対する姿勢を学んだと思う。

B: 一番、印象が残ったのは、一度最初アルバイト、ホールのほうだったんですけど、なんか、声が小さかったんで。それ、すごく叱られて。おまえ、何だ、元気ないの？とか言われて。次は入らなくてもいいよとかみたいな、言われて。

*: あ、そういうのがみんな怖いって言うんだよね。フフフフ。

B: はい。でも、じゃあ自分が駄目なんだって思って。やっぱり、逆に考えると、もし相手、自分が会う相手が小さい声で話してくれたら。やっぱり、コミュニケーション取れないか。で、それで、やっぱり活発な、店員のいるお店だったら、やっぱり人気があるっていうのもあるんだねって、思って。じゃあ、次に、もう大きい声で。それで、今でも、今の職場でも、私が一番声が。

*: 声が大きい。

閉店後の態度でも店長に注意された。

B: もう一回は閉店の時間で。もう1日、疲れたので、疲れた顔をして。その時も、接客とか、もうないし。じゃあ、その顔してもいいじゃんって感じで。で、掃除しながら、こう。下を見な

がら、お掃除して。おまえ大丈夫かといって言われて。え、なんですか。今、お客がいないけど、まだ店員さんは周りにいるじゃないって。みんなも疲れてるけど、おまえの顔を見たら、もっと疲れるよって。それで、ああそうなんだっていうふうに。じゃあ自分の顔だけじゃなくて、やっぱりみんなの様子を見ないといけないんだっていうふうに気付いて。それで、今でも、今の職場でも、いつも元気に。

日本でのアルバイト経験から得た就業姿勢は現在の仕事にも活かされており、新入社員などにも伝えている。

留学中印象に残った二つのエピソードがある。一つは、「町おこし」関連の授業で外国人にゴミ分別をどのようにしてもらうかを提案する発表をした時、市の行政の幹部の方が来てくれたことだ。ベトナムでは考えられないことなので、「ただ大学生の授業でも、こんな大事な方が来てくれるなんて。すごいな」と思った。在学中の学生が大事にされていると感じた。もう一つは、大学でハロウィーンの時期に開かれた国際交流パーティに学長が出て、挨拶してくれたことだ。文化差を感じると同時に、ここでも留学生が大事にされていることを感じた。

《留学生としての学修》

日本語の授業はプレイメントテストの結果一番上のレベルのクラスになったが、日本語の授業は面白くて問題はなかった。

しかし、日本人学生向けの教養科目や専門科目では戸惑ったことがいくつかあった。一つは、自分で授業を選ばなければならないことだった。ベトナムとは異なる制度なので、先輩からの情報を参考にして、単位互換ができる日本語関連の授業や異文化理解の授業、指導教員のゼミなどをとった。

次に、日本人学生向けの授業で困ったのは多くの授業がレポートで評価されることだった。

B: ベトナムと違ったのは、レポートで採点。結果と成績となるんですけど。ベトナムではそれはないんですね。ほとんどは全部、テストの形で。

「異文化理解」のような正解がないものをどう書けばよいのかにも戸惑った。

B: それはそれで、ちょっと困ったんですね。で、テーマも考えながら、とかみたいな。で、チューターさんもいたんですけど。チューターさんの意見も聞いて。ちょっと教えてくれない？みたいな。それで、グループのみんなも、ちょっと参考にして。それ作れたんですけど。それはやっぱりレポートは、採点っていうのはなかったんで。それは困ったことかな。

もう1点、ベトナムではないもので戸惑ったのは毎回授業後に質問やコメントを書く「振り返り」だった。

B: もう、あれは。やっぱり、普通の生活上の日本語コミュニケーションとかは全然、問題ないですけど。

*: はいはい。違いますね。

B: はい。でも、専門的な言葉とかも重なって。ああって感じで。じゃあ、え？最後にどう、どう書けばいいのかみたいな。

ベトナム語なら書けたかもしれないが、日本語では難しかった。

B: 書いたんですよ。やっぱり私、ちょっとでも書きたいな気分で。よく考えて、書いて。でも、文法的とかも全然、気にしないんで。ただ、聞いてることを、意見とかを書いたりして。でもそれも、問題でしたね。困ったこと。

さらに、指導教員のゼミは社会心理学で、各学生が準備した新聞記事を読んで意見交換するという形で進められたが、当日配られたものは漢字などの問題で読むのが大変だった。自分が担当の時はみんなが興味を持ちそうなテーマを選んだが、他の学生が選んだトピックがあまり関心のないものの時はつまらなく感じた。

留学中の日本語の上達については自分では気づかなかったが、チューターに日本語を褒められたり、修正や添削部分が少なくなったりしたことで実感した。

B: これはちょっと、正しい日本語にしてくれない?とかで、私の言いたいことを言って。間違っていないよって。あ、そうなん?って感じで。

*: うんうん。

B: もう一回レポートを書いて、チューターさんに出して、返却するのを多分、赤が。

*: 赤が。

B: いっぱいあるんだなって思ったんですけど。意外と少なかったんで。

*: あー。添削部分が少なかった。

また、日本語クラスのクラスメートたちは優秀だと思っていたが、韓国の留学生に「Bさんはクラスでトップ」と言われた時は「え?そうなん?って感じ」だったが、嬉しかった。

《人間関係》

単位制度でクラスという形になっていないためか、価値観の違いかわからないが、授業で一緒だった日本人学生が教室を出たら「それでもう知らないぞみたいな」態度には、困惑した。

B: 私と一緒に入った子が、同じグループに入った日本人の男の子がいて。でも、クラス出たらです。道で会ったら、ちょっとって、こうしよう(頭をさげる動作)と思ったんですけど。すぐに避けちゃうぐらいな。

グループワークでも一回限りの場合は同様だったが、学期を通じて同じグループだった場合は次第に仲良くなって、一緒に出かけたりするようにもなった。

一対一でついた個人チューターは来日当初から「すごく熱心で、親切にしてくれた」。

B: いろいろ教えてもらって。レポートの直しとかをしてくれて。それで、一緒に買い物に行かない?とかみたいなもの。

*: うんうん。誘ってもらった。

B: はい。ありがたいんですけど。でも、私、別に、チューターは、やっぱ、サポートしてくれるっていう役割なんですけど。私のほうは別に、言語とかも全然、問題なかったんで、大丈夫だよって。週は1回ぐらいは(会っていた)。

2学期目になると、寮のチューターや留学生、寮のイベントに参加する日本人とも仲良くなれた。

*: じゃあ、友達も2学期目は、グループに入れたという感じですかね。

B: 入れたんですかね。はい。深くは入れなかったんですけど。

*: あ、もっと深く入りたかったですか。

B : いや、別に、それぐらいでいいって感じでした。

友人たちとは、日本人・留学生ともに今でも連絡を取り合っている。社会人になってタイに出張した時タイの留学生にも連絡をとった。

指導教員はベトナムの大学と交流のある先生だったが、毎月留學生活の報告を出す程度で、ゼミ以外ではあまり会うことはほとんどなかった。履修していた「異文化理解」の担当教員は個別のコミュニケーションはなかったが、オープンな感じで楽しく授業を受けることができ、次の学期も同教員担当の授業をとった。

アルバイト先での人間関係も前述のように良好だった。社会人となって、日本に出張した際にはお世話になったラーメン屋の店長に会いに行った。

コンビニでも常連の人がいて、あまり人が入っていない時にはよく話しかけられた。

B: 方言を使わずに、標準語、言ってくれた方だったら、よくコミュニケーション取れたんですけど。

いつも買うたばこを取り置いたりした。スタッフとの関係もよく、お土産をもらったりもした。後輩たちにアルバイト先として紹介したので、今も後輩たちがそこでアルバイトをしていると思う。

地域の人との交流としてはホームステイがある。ホームステイ終了後もホストマザーがX大学のある町の友人に会いに来た際に2、3回ほど会った。今でも時々連絡を取っている。

《留学後》

帰国後単位互換はできて卒業要件は満たしたが、卒業時期が過ぎていたので、半年間卒業を待つことになった。また留学したいという気持ちがあって書類などを揃えて留学の可否の結果を待つ間、自営業の家族を手伝った。時間があつたので、英語の塾に通ったり、体力づくりにジムに通ったりした。いろいろあって留学は実現できず、今の会社に就職することにした。

顧客はほとんど日本企業で、留学や技能実習生関連の事業を行っている。社長のアシスタントとして、日本対応の窓口となる業務を担っており、翻訳・通訳業務も行っている。翻訳スタッフもいるが、重要な文書の翻訳を担当している。仕事は忙しく、時差があるので夜でも対応しなければならないこともある。

B: もう、日本語、うんざりするぐらいのときもありますよ。アハハハ。

*: ああ、そうですか。ハハ。

B: 私ずっと仕事がいっぱいで。ああ、ちょっと勘弁してくれない、ぐらい。

*: ああ、それぐらい、やっぱり。

B: それもあるんですけど。でも仕事がないときは、少ないときは、もう、つまんないし。忙しくていいんですけどいうふうに言ったんじゃないですか。

仕事をする上で留学経験が役に立っていると思うのは、日本語能力はもちろんだが、前述の就業姿勢や日本人に対する接客態度である。例えば、敬語を使うかどうかなど丁寧さの調整や雰囲気づくり、表情などもアルバイト経験を通してうまくできるようになったと思う。

細かい慣習は日本に行かないとわからないと思う。例えば、日本ではお店に入ると必ず「おしぼり」が出されるが、ベトナムでは店員に伝えないと出てこない。そのため、日本人を接客する際おしぼりが出ていなければすぐ伝えるようにしている。このように日本での社会経験から学んだこと

が多いと思うが、授業で得た知識も仕事に役立っている。

B: 日本事情の授業とかでも、日本の歴史とか、そういうのも教えてもらったんで。それでも、その話でも、接客のとき、やっぱりそれは日本人の常識なんですけど。ベトナム人が知ってるなら、あ、すごいな、みたいな。それもあるんで。それを使って話かけたりすれば、やっぱり、仕事以外でも、ちょっとでもね。

*: 近くなる。

B: 近くなるように。そういう話を使っていますね。

また、他の社員とあまりコミュニケーションがとれていない若い日本人社員に対して、「みんなとコミュニケーションをとってほしい」という助言をする際にも、日本文化への理解が活用できたと思う。

日本語は仕事を通じてブラッシュアップしている。メールのやりとりでは敬語を多用するので、「自分のものにしよう」と思って取り組んでいる。

留学終了後もう一度留学したいという気持ちがあった。和製英語に関心があって研究したいと思っていた。言語は面白いと思う。

B: 言語で、傷つくとか、そういうのも、できますから。やっぱり見えない武器なんですよ。言語で、話すことで、解決できると思いますので。

進学したいという気持ちは持ち続けていて、忙しくない時期には自習していた。今は忙しくて自分の時間もないぐらいだが、自分自身のことを「勉強するタイプ」だと思っている。

《留学を振り返って》

留学を通して、専門の日本語の上達だけでなく、アルバイトなどから日本人の就業姿勢や接客態度などについて多くのことを身につけられたと思う。日本に行かなければ感じ取れない細かな慣習にも気づけた。

留学全体の評価としては「よかった」と思う。今（インタビュー時に）具体的にあげられないが、前述したことよりもっといろいろなことが身についたと思う。社会人になって数年たったからこそそう思える。留学直後だったら、「遊びの思い出ばかりだった」だろう。

留学を振り返って留学中「やればよかった」と思うことは、アルバイト時間を減らしてもう少し授業に時間を使うことだ。例えば、日本人向けの授業で面白くて役に立つと思うものもあったが、準備があまりできず集中できなかった。

もう一つは寮の留学生たちともっとコミュニケーションをとることである。

B: もうちょっと、あの、寮の皆さんと、部屋にいる時間じゃなくて、ちゃんとみんなと会って、もうちょっとコミュニケーションを取ったらいいなって。

定められた時間内のアルバイトであったが、終わると疲れて部屋に戻るだけだった。もっと飲み会などにも参加できればよかったと思う。

帰国後、留学先の選択に迷っていた後輩たちに経験をもとにした助言した結果、後輩もX大学に留学することになった。

B: （後輩たちが）帰国後も、よかったんですよって。他のところに行った子たちは、奨学金とか、なんかもらったらしいんですよ。でも、私もらわなくてもいい。X大学がよかったってい

うふうに言ってくれました。

後輩たちも今ベトナムの大学や日本で働いている。

3.2.2. Bさんの語りのまとめ

Bさんの日本語学習のきっかけは中学入学時に選択科目に父親が相談なしに日本語を選んだことだったが、勉強してみたら面白く、高校でも勉強を続け、作文コンテストで優勝して2週間日本に行く機会も得た。大学でも日本語を専攻することにした。大学では、初めて日本語を勉強する学生たちもいたので、最初の頃の授業はつまらなかったが、負けるわけにはいかないと思い、満点をとることを目指して勉強した。日本語を勉強していて日本に行かないのは残念だと思い、留学することにした。当時交換留学できるのはX大学だけで成績が優秀でなければ選ばれなかったので実力を見せたいという「プライド」があった。

留学時日本語はN2程度で、日本文化についての授業もとっていたので、生活には問題なかった。日本語の授業は上級クラスで、面白かった。しかし、日本人学生向けの科目ではベトナムとは異なる制度に戸惑った。自分で授業を選ぶことやレポートで評価されることだ。レポートでは正解がないものをどう書けばよいのかわからなかった。授業の終わりに「振り返り」のコメントも書くのが難しかった。また、指導教員のゼミは、各学生が準備した新聞記事を読んで意見交換するという形で、当日配られたものを読むのは大変で、関心のないテーマの時はつまらなく感じた。日本人向け科目は興味のあるものもあったが、アルバイトで疲れて集中して準備が十分できなかった点は残念に思っている。日本語の上達はチューターに褒められたり、添削部分が減ったりしたことで実感した。韓国人のクラスメートに「クラスで1番だ」と言われた時も嬉しかった。

人間関係では、1学期目に苦労したのは友人作りだった。日本人向けの授業では、単位制なので授業後教室を出たら「知らない」という感じで困惑したが、学期を通してのグループ活動では徐々に仲良くなり、一緒に出掛けるようにもなった。留学生については後学期からの留学だったため、留学生寮でも既に友人関係ができていたり、同国人同士固まっていたりして、その中に入るのは難しかった。2学期目に入ると、留学生寮のイベントなどを通じて留学生、日本人の友人ができたが、深く付き合うというほどではなかった。アルバイトが忙しかったことやその程度でいいという思いもあったからだ。今でも連絡を取り合い、出張時に会ったりするが、留学中にもっとコミュニケーションをとっておけばよかったと思っている。

留学中の経験としてコンビニとラーメン屋でのアルバイトは大きな位置を占めている。店長やスタッフとの関係は良好で、ラーメン屋の店長から接客態度や閉店後の姿勢まで厳しく指導されたことは現在の仕事に役立っている。

もう一度留学したいという気持ちはあったが叶わず、現在の会社に就職した。社長のアシスタントとして日本対応の窓口となる業務を担っている。留学の成果は、社会人になった今だからこそ評価できると思う。日本語の上達はもちろん、日本人の就業姿勢、接客態度や日本に行かなければ感じ取れない細かな慣習など多くのことを知ることができ、現在の仕事に活かされている。インタビューでは語りきれない多くのことを学んだと思う。奨学金がなくても留学することを後輩にも勧めている。

4. 考察

日本語専攻で約1年間交換留学をした2名だが、奨学金やアルバイト経験の有無、受入態勢等の違いなどによる個別的な体験が語られた。本章では、2名の共通点と相違点を整理し、「日本語習得」、「人的ネットワークの構築」、「総合的な留学評価」の3項目にまとめ、考察を加える。

《日本語習得》

2名の日本語学習開始は中学からと大学からと異なるが、留学時の日本語レベルはJLPT N2程度で、自身の日本語能力については八若・小林(2021)のN3レベルで来日した元留学生のような不安はなく、日常生活でのコミュニケーションにも問題はなかった。2名ともに日本人向けの科目をいくつか履修しているが、そこではまず履修科目を自分で選択することや討論中心の授業、試験ではなくレポートによる評価など、ベトナムとは異なる制度に戸惑っている。Aさんは多くの文献を読んだりレポートを書いたりするのに苦労したが、帰国後読み書き能力の向上を実感している。一方、Bさんは日本人向けの授業には関心を持ちつつもアルバイトなどで十分準備ができなかったり、指導教員のゼミも話題によってはつまらなく感じたりした。日本語の上達は留学中にチューターによる添削箇所が減って褒められたり、留学生の友人に指摘されたりしたことにより確認している。

2名ともに留学によって上達した日本語は高度な日本語能力が求められる現在の仕事でも活かされていると感じると同時に、さらなるブラッシュアップに努めている。

《人的ネットワークの構築》

2名ともに留学当初日本人の対人行動に冷たさを感じ、友人作りの難しさを指摘している。日本人学生の友人作りの難しさは有川(2016)、八若(2018)、吉野(2017)などの研究で指摘されている。有川は、学部留学生の日本人の友人作りの難しさについて、自国の体験に基づいた友人関係の認識とのずれが困惑や不信感を引き起こしているのではないかと指摘している。この指摘のように、Bさんは日本人の友人作りの難しさの要因をクラスやカリキュラムが固定しているベトナムとは異なり、授業ごとに履修者が異なる日本の大学では教室を出ると知らない者同士ようになり、友人関係には発展しにくかったと分析している。また、Aさんは留学当初に感じた冷たさは親切的な日本人が描かれているマンガなどから受けたイメージとのギャップに起因していると述べている。このような個別的な理由の分析が自発的に語られるのはライフストーリー研究ならではの成果であると言えよう。

1学期目は2名ともに留学生の友人作りでも苦労している。10月来日の2名にとって、前学期は既に構築された友人関係の輪や同国人同士のグループの中に入るのは難しく感じられた。しかし、2学期目になると、留学生向けのイベントやサークル活動への参加や学期を通じたグループ活動によって留学生、日本人学生ともに友人関係が築くことができたようだ。1学期間留学と2学期間留学の成果の比較を行った八若(2020)では、2学期間留学者には自発的なコミュニティ参加による他者との関わりから自信を得てさらなる人的ネットワークを拡大する循環的過程が観察され、人的交流の差に留学期間の関与が認められたとしている。本研究の2名も同様に人的ネットワークの構築に一定の時間が要したと言えるだろう。

アルバイトをしていたBさんは、アルバイト先の店長やスタッフと良好な関係を築き、インドネシア(八若2018)やタイ(八若・小林2021)の元留学生と同様に、アルバイトを通して日本の職場での慣習や就業態度が身についたと感じていた。一方、奨学金を得たためアルバイトをしなかったAさんは指導教員やゼミの学生と行動を共にすることも多く、良好な関係であった。アル

バイトでもゼミでの勉強でもベトナムでは経験したことのない困難に直面することがあったが、それを自力で、または周囲からのサポートを得て克服したことによって自信を得ていく過程がインタビューを通して観察された。

2名ともに留学中の人的ネットワークは留学後も維持されていたが、留学後10年近く経過したAさんはSNSをやめたことをきっかけに、連絡がとれなくなったことを残念に思っている。

《総合的な留学評価》

全体として2名の留学評価は肯定的であった。Aさんは「日本留学は人生を変えるような体験だった」と言い、Bさんもインタビューでは語り切れない多くのことを留学から学んだと言う。

Aさんはいくつかの転職を経て、現在の仕事に満足している。Bさんは進学を希望していたものの、現職では上司から重用され、忙しい日々を送っている。いずれも留学を通して身につけた日本語能力が現在の仕事に役立っていると述べている。また、日本で生活しなければわかりにくい暗黙の社会規範や日本人の考え方への理解は日本人を顧客とする仕事においては重要な役割を果たしていると感じている。さらに、就職においては日本に留学したこと自体が評価されていると感じている。

ハノイの日系企業における元留学生を中心としたベトナム人の採用・就業の実態を調査した堀井(2011)は、ベトナムでは漢字習得がネックとなってJLPT1級(原文のまま)のレベルに達するのは難しく、2級、3級のレベルで日系企業に就職するケースが多いと述べている。そのため、日本語能力の高い留学経験者は日本語の応用力、日本人の考え方など異文化コミュニケーション上の理解力がある点で高く評価されているという。この指摘はまさにAさん、Bさんにも当てはまると言える。

5. おわりに

本稿では、日本語専攻で日本関連企業で主として通訳・翻訳業務に携わるベトナムの元交換留学生2名のライフストーリーを分析することによって、留学経験がどのような意味を持ち、その後の人生にどのような影響を与えているかを検証し、留学評価が日本語習得とどのように関わっているのかを探った。

奨学金やアルバイト経験の有無、受入態勢等の違いなどによる個別的な経験が語られたが、2名ともに留学評価は肯定的であった。2名は留学当初は友人作りに苦労したが、2学期目にはサークル活動などを通じて日本人、留学生とも良好な関係を築き、留学終了後も維持していた。留学中直面する困難を自力で、または周囲のサポートを得て克服することによって自信を得ていた。ベトナムの就業では留学したこと自体が評価され、留学を通して得た高い日本語能力や日本で生活しなければわかりにくい社会規範や日本人の考え方などへの理解が、日本人を顧客とする業務の遂行に大きく寄与していた。

以上のように、2名の語りから、来日して日本で生活したからこそ得られた人的ネットワークや体験、日本社会や文化への理解があることを確認する結果となった。コロナ禍で留学生が来日できない状況が続いているが、その地に身を置く本来の留学経験の重要性を改めて感じさせられる結果となった。

コロナ禍の影響で進んだオンラインの活用は今後も推進していく必要があるだろうが、本来の留学とオンライン双方の利点・弱点を吟味し、利点を活かした留学プログラムの開発が課題となるだろう。

付記

- 1) 本研究は科研費 (17K02839) による研究成果の一部である。
- 2) 本研究の調査は 2019 年度茨城大学サバティカル制度の支援を得て行った。

注

- 1) ライフストーリーとは「個人のライフ (人生、生涯、生活、生き方) についての口述の物語」であり、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」(桜井 2012) である。
- 2) インタビュー項目：
 - ・ 留学前：留学前の日本語学習歴 / 留学したいと思った動機やきっかけ / ○○大学を選んだ理由 / 留学前の不安・期待していたこと
 - ・ 留学中：来日時の様子 / 期待していたこととの違い / 留学生としての生活 (勉学・日常生活・友人関係) / 印象に残っているエピソード / 先生・クラスメートとの関係 / 地域の人との交流 / 日本語学習について / 日本語上達の実感
 - ・ 帰国後：現在及び将来設計において留学経験が役に立ったと思うこと / 日本語に対する意識 /
 - ・ 全 体：自身の日本留学経験をどう評価するか / やってよかったこと、やればよかったこと / 現在の生活との関連
- 3) 要約した部分の「 」は協力者の言葉を引用したものである
- 4) 「*: 」は調査者の発言。

引用文献

- 有川友子 (2016) 『日本留学のエスノグラフィー インドネシア人留学生の 20 年』大阪大学出版
- 大河原尚 (2008) 「短期交換留学生生活アンケート調査報告」別科日本語教育：大東文化大学別科論集 9, 142-156.
- 小山晶子 (2016) 「留学先としての日本の可能性拡大に向けて－交換留学の経験が帰国後の学業と就業へ及ぼす影響について－」名古屋大学国際教育交流センター紀要第 2 号, 19-23.
- 国際交流基金 (2020) 『海外の日本語教育の現状 2018 年度 日本語教育機関調査より』国際交流基金
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』弘文堂.
- 八若壽美子 (2018) 「インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 1, 29-45.
- 八若壽美子 (2019) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価－家族と日本で生活する元留学生の場合－」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 2, 29-46.
- 八若壽美子 (2020) 「タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価－留学期間による比較」2020 年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 364-369.
- 八若壽美子・小林英弘 (2021) 「タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価－翻訳・通訳業務従事者の場合－」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 4, 119-136.
- 堀井恵子 (2011) 「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究：ベトナム ハノイの日系企業などへのインタビューからの考察」武蔵野大学文学部紀要 12, 74-61.
- 吉野文 (2017) 「短期交換留学プログラム参加者に対するフォローアップ調査－日本語を専攻する中国の元交換留学生へのインタビュー調査－」国際教育第 10 号, 49-63.